

「二流は気が楽です。」

「成長した子どもが親から離れていかなかったら、そのほうが変じゃありませんか。結婚すれば、伴侶との暮らしや自分の家族が大切になるのは当たり前です。」

「治らないがんで覚悟して亡くなる方は、幸せそうに見えます。残り時間がわかるし、人生を振り返ることができるからです。」

「私は、死に対して恐怖感を抱いたことはありません。きっと、眠りにつくようなものではないでしょうか。ぐっすり眠って、そのまま目が覚めないような感じ。」

もしも「安楽死させてあげる」って言われたら、「ありがとうございます」と答えていますぐ死にます。生きていたって、もう人の役に立ちませんもの。

自分が死ぬなんて長い間考えたこともなかったのに、九十歳になって仕事だんだん減ってきて、ほかに考えることもなくなったら、「あ、もうすぐ死ぬんだ」と考えるようになりました。

私はどうやって死ぬんだろうか。認知症になって何もわからなくなったら、生きていたくない。意識がしっかりしていても、身体が動かなくなったら、生きていたくない。楽しみがなくなったら、やっぱり生きていたくないと思うんです。

可愛い子どもや孫がいて、その顔を見るために生きていたいとか、ずっと生きていてほしいと望まれるなら別です。私なんか、夫にはどうにも先立たれ、子どもはいません。親戚づきあいもしてきませんでした。会いたい友だちや思いを残す相手もないし、生きていてほしいと望んでくれる人もいません。天涯孤独の身ですから「もう、いいや」と思っています。

あとはもう、他人に面倒をかけたくないだけ。身の回りのことが自分でできなくなって、下の世話から何からしてもらって迷惑をかけるなら、そうなる前に死なせてもらいたい。死に方とその時期の選択くらい、自分でできないかなと思うのです。

大正生まれの同世代の男は、戦争に行ってたくさん亡くなりました。生きて帰ってきた男たちは、自分より若い女性と結婚していきました。私たちは飛ばされ世代。トラック一台の女に男ひとり、といわれたくらいです。女子大の仲間も、半分は結婚しないままです。酷いでしょう。

私も含めて同じ世代に健康な人が多いのは、粗食だったせいかもしれないと思うんです。若いときにハンバーグ食べたりコカ・コーラ飲んだりしないで、野菜と芋ばかりで育ったから元気なのかなと、いまになって思っています。

ありがたさの意味も違います。お金がなくても平気だったし、少くらい食べ

なくても平気だった。コッペパン一個買えたときの気持ちといたら、いま豪華な三万円のコース料理を食べるより、どんなに嬉しかったか。

そうやって辿り着いたのが、山形県の左沢(あてらざわ)です。十月末の山形盆地は、見渡す限り黄金色でした。焼け野原の東京を出発したのに、そこは波打つ稲穂の海なのです。「あ、こんなにご飯がある」と感動したことを、いまも忘れません。日本は負けた。でも豊かな景色が残っている。まさに、国破れて山河あり、です。

「この国はまだ大丈夫だ。私も生きていけるかもしれない」。あの景色を見たとき初めて、そう思えたのです。

伯母の疎開先は材木屋さんで、納屋を借りていました。材木屋のおばさんは私たちにお茶を入れ、おはぎを出してくれました。まともなお茶だって久しぶりだし、あんこにくるまったおはぎなんて何年ぶりでしょうか。もう美味しくて美味しく、夢中で頬張っていると、どうも山形弁で「そんなにたくさん食べるな」と怒られているようです。

「そうか、こっちだって物資不足なんだから、やっぱり食べ過ぎたんだ」と反省していたら、違いました。そのあと、きな粉にゴマ、クルミ、枝豆をすりつぶしたずんだ、など七種類ものおはぎが出てきたのです。さっき言われたのは、「まだ次があるから、あんこのぼっかり食べるな」という意味だったんです。

山形へ行って、私は救われました。明日こそお国と一緒に死ぬんだと思い詰めていたのに、身近にあった死とはまるで反対の、生と希望と未来を感じることができたのです。

加代は東京に出て売春宿に身を寄せますが、お酒の飲みすぎで喀血して死んでしまい、残された子供をおしんが育てることになります。

可哀想な生涯ですが、あんなふうに落ちぶれていったお金持ちのお嬢さまが、当時はたくさんいました。良家へお嫁に行く教育しか受けていないので、働くことができません。稼ぐ手段が何もなければ、体を売るしかなかったのです。

時代の波に乗れなかったというか、置いていかれたというのか、うまく生きられなかった女性たちを、たくさん見ました。

おしんのような貧乏育ちのほうが、やっぱりたくましい。教育を受けられなくても自分で字を覚えて、生き抜いていくのです。

私は、葬式も偲ぶ会もやってほしくありません。意味のない社交の場に使われたくないんです。それに私の葬式なんかやっても、どうせ義理で来る人ばかりですから、わざわざ足を運んでもらうのが申し訳なくてね。義理だったら、来てくれなくていいんです。義理が不要なら、お葬式も不要なのです。焼いてお墓へ入れてもらえれば、それでいいんです。

お墓はすでに、父の故郷の愛媛県今治市に建ててあります。二十八年前に亡くなった主人・岩崎嘉一の墓は静岡にあるので、別々です。このお墓は、マザコンだった主人が母親と一緒に入りたいたうので、亡くなったときに建てました。そこへ、主人の両親とお兄さん夫婦も入っています。

お兄さんは主人が亡くなる前、私に言いました。「うちの墓には、**寿賀子さんは入れにゃあから**」。私は「そうですか、わかりました」と答え、心の中では「ありがとうございます」と喜んで、もう理由なんか聞きませんでした。姑の問題ではたいそう苦労しましたから、お墓の中まで一緒なんて、こちらから御免こうむります。

お国の命だからこそ、粗末にはしてはいけなかったのです。私がアメリカ兵に辱めを受ける前に死ぬ覚悟でいたのも、自分自身のためではありません。私がそんなことをされたら、**お国が辱めを受けたことになるから**です。

脚本家の研究生として映画会社の松竹に入ったのは、一九四九年です。

・・・

試験には千二百人も応募者がいました。採用されたのは五十人。一年の研修期、間ののち、**入社したのは六人**です。驚いたことに、女性は私だけでした。二〇一六年に亡くなった脚本家で高峰秀子さんの夫の松山善三さんも、同時期入社です。

私は二十五歳でした。「**松竹初の女性シナリオライター**」という謳い文句はよかったです。あの頃の映画界は徹底した男社会です。「脚本家はたくさんいるのに、なんでわざわざ女と仕事しなきゃいけないんだ」と、目の前で怒る監督がいました。お茶汲みや宴会でのお酌も仕事でした。先輩脚本家の家へ行き、奥さんに命じられるまま掃除や皿洗い、犬の散歩までさせられました。**抵抗すれば、仕事がなくなります。まるで戦争中の階級制度のような、理不尽な差別があったのです。**

せっかく儲かった命だというのに、なぜこんな無意味なことに費やさなければいけないのか。本当に情けない気持ちでした。

たまに脚本を任されて、完成した作品の試写をドキドキしながら観ると、私の書いたセリフは影も形もありません。撮影現場で、監督や俳優が勝手に変えてしまうのです。十年たっても納得できる仕事に恵まれず、ついに秘書室への異動を命じられたとき、私は覚悟を決めました。

「私は脚本を書くためにこの会社に入ったので、お茶汲みなんかしたくありません」

辞めることに未練はありませんでした。そして、「女に何ができる」と言われ続けた私は、「女にしか書けない脚本を書いてやろう」と心に誓ったのです。それが一九五九年。

高尚な芸術作品が一流のドラマなら、私の書くドラマはどれも二流です。ドラマが二流なら、書く人間も二流。私は二流人生で、一流になりたいなんて夢にも思ったことはありません。だって一流になったら、しんどいでしょう。その分、二流は気が楽です。

ただし昔の人間で律義ですから、締め切りだけはきちんと守ってきました。締め切りに遅れていいのは、一流の作品を書く脚本家だけです。私みたいな二流はせめて締め切りくらい守らなきゃ、と自分を戒めてきました。向田さんは書くのが遅くてギリギリでも、中身が素晴らしいから通用したのです。私みたいなのが締め切りに遅れたら、次の仕事は采ません。そうやって生き延びてきました。

「橋田寿賀子、引退宣言」と報じられて、驚いたことがありました。二〇一五年に、あるテレビ番組のインタビューを受けた直後です。

・・・

実際はその前の年くらいから、脚本の依頼が采なくなりました。どのテレビ局からも「書いてくれ」と言ってこなくなれば、「あ、私の時代は終わったな」とわかります。自ら引退を宣言するまでもなく、お払い箱になったわけです。

あれから三年がたち、私はもう、世の中から必要とされなくなってしまいました。

・・・

自分が必要とされていないってことば、最近のドラマを観るとよく理解できます。私を書くような内容のドラマは、時代に求められていないのです。

私は、家族がいないからホームドラマがたくさん書けた、と思っています。だって子どもがいたら、好きなように書けないでしょう。自分の書いたセリフを見られて、「お母さんはこんなこと考えてたのか」なんて思われると困ります。

そうならないようにセリフを手加減したり、カツコついたりするかもしれません。そんなドラマが、面白くなるはずありませんよね。家族がいないから、誰に遠慮することもなく、勝手に想像を膨らませて書くことができるのです。

石井ふく子さんとも、「お互い、家族がいなくてよかったわね」と言い合っています。もしも私に息子なんかいたら、それはそれは口うるさくて意地悪な姑になっていたことでしょう。

お嫁さんなんか連れてこようものなら、どんな女性だろうと「ここが気に入らない、あそこが気に障る」と、間違いなくダメ出しの連続です。

臨終シーン、合戦シーン、ベッドシーンも、なるべく書きません。みんなが病

床に集まって、涙を流して最期のお別れ——ドラマチックに盛り上がるかもしれませんが、嫌いなんです。人さまにそんなものを見せたって、喜ばれないと思う。

臨終の前に誰が駆けつけて誰が来ないとか、死んだあとに通産相続をどうするとか、前と後のほうがドラマになると思うのです。肝心の場面はあえて避けて、**前と後でドラマを作りたいのです。**

・・・

ベッドシーンなんか最たるもので、前と後こそがドラマでしょ。「最中、なんて、やることはみんな同じですよ。だから「なんでベッドシーンなんか必要なの？ 役者が寝るところ撮ってどうすんのよ」って言うんですけど、演出家は撮りたがるんです、まったくもう。

子どもに尽くした人ほど、思い通りに育たなければ空しさや悔しさを感じるのかもしれませんが。でも成長した子どもが親から離れていかなかったら、そのほうが変じゃありませんか。結婚すれば、伴侶との暮らしや自分の家族が大切になるのは当たり前です。冷たいようですが、子どもをいつまでも自分のものだと思っているから、裏切られた気持ちになるのだと思います。

治らないがんで覚悟して亡くなる方は、幸せそうに見えます。残り時間がわかるし、人生を振り返ることができるからです。死ぬことがわかってそれに応じたケアを受けられるのは、安楽死に似ているかもしれません。

私は、人間ドックを年に一度受けています。CTとか胃カメラとかPETとか。血液や尿検査は、毎月欠かさずやっています。血糖値を調べたり、腫瘍マーカーを調べるのです。

お医者様にも行きますし、降圧剤をはじめ血糖値やコレステロールを抑える薬などを毎日十種類以上飲んでます。止めたいのですが、薬のおかげで数値が正常範囲に保たれているので、止められません。

明日死んでもいいと言っているくせに、なんだ、矛盾しているじゃないか、と思われるかもしれません。確かに、検査を受けたり薬を飲むのは、人間としての弱さだと思います。でも私、生きている間はちゃんと生きたいんです。死ぬまでは元気で生きていたい。それが私の望む尊厳です。

食事は毎日、お肉を二〇〇グラム。医者から言われたんです。

「年を取ると筋肉が衰えるから、できるだけ肉を食べて筋肉を作らなきゃいけない。筋肉がつかないものばかり食べてると、どんどん歩けなくなる。だから吸収されなくても、肉を食べなさい。健康のものは、筋肉です」

私は、死に対して恐怖感を抱いたことはありません。きっと、眠りにつくようなものではないでしょうか。ぐっすり眠って、そのまま目が覚めないような感じ。まさに「永眠」です。それでいいと思っています。死んだあとは何もわからないし、きっと何もないんでしょう。

「死んだら、誰それに会いたい」とか言いますが、死んでから会えるはずないと思いますよ。私は、あの世で誰に会いたいとも思わない。

いまの私のたったひとつの楽しみは、大型客船の「飛鳥Ⅱ」で行くクルーズです。日本一周やアジアクルーズに乗ることもあれば、世界一周はこれまで三回行きました。南極にも二回行きました。

・・・

船に乗るのは、人間ウォッチングが面白いからです。いろいろな人が乗っていて、九州の人、東北の人、やっぱりカラーがあるし、お医者さんや弁護士さんや社長さんや、いろいろな背景をもつ人に会えます。仲良さそうな夫婦もいるし、くっついたかと思えばケンカしている夫婦もいます。

いいご夫婦だなと思っていると、次の年には奥さんが一人で乗っていて、旦那さんは亡くなったっておっしゃるんですよ。海に散骨するということで、皆さんで抱擁して一緒に撒いてあげました。しみりしてね。

ところがその次一緒になったときは、明るく「こんにちは〜」って、もう派手になっちゃって、ミニスカート穿いて、すごい美顔術して綺麗になってるんです。たまげました。未亡人になった方は、本当に明るくなります。

船に乗り合わせた方と話していると、「ああ、この人たちは普段どういう生活をしてるのかな」という興味が湧きます。そこでまた、脚本のヒントをもらうのです。

そんな機会でもないと、私たちはなかなか人に会えませんもの。サラリーマンでもないし、ドラマを作るスタッフは限られていますから。

船ではお友だちがたくさんできますが、クルーズが終わって陸へ上がったあとはベタベタと付き合いません。リピーターがたくさんいますから、別のクルーズでまた会えば「あ、またお会いしましたね」。楽しく過ごして、終わればお別れする。そういう関係が、私には心地いいんです。

安楽死を叶えてくれる団体があります。その中で外国人を受け入れてくれるのは、スイスにある「ディグニタス」という団体だけです。

厳密に言うと、スイスでも安楽死は違法で、自殺ほう助が合法的なだけなんです。したがって最期の瞬間は、医師が注射や点滴をするのではなく、処方された致死

量の麻酔薬を自分で飲む仕組みです。コップの液体を飲み干すと、数分で眠りにつき、そのまま苦しむことなく、一時間くらいで呼吸が止まるそうです。

「ディグニタス」で安楽死させてもらうには、もちろん条件があります。希望者が提出した医療記録を医師が審査し、治る見込みのない病気で耐え難い苦痛を伴うなどの要件が満たされ、スイスの裁判所が認めた場合に限られます。死亡後には、警察の検死もあります。

## フォーリーカテーテル 尿道カテーテル

有名なのは、完九右四月に東海大学医学部付属病院で起こった事件でしょう。日本で安楽死の法的な正当性が争われた、たったひとつの裁判です。

・・・

家族から「楽にしてやってください」と繰り返し求められた医師は、最後に致死量の塩化カリウムを静脈注射して、患者は亡くなったのです。

医師は病院から懲戒解雇されたのち、殺人罪で起訴されました。患者本人からの要請ではないため**囑託殺人ではなく、殺人**です。懲役三年の求刑に対して、横浜地裁は懲役二年執行猶予二年の有罪判決を下しました。

この医師は、勤め始めてまだ三年目の若い助手でした。家族とのやり取りは右に紹介したよりもたびたび繰り返されていて、判決文を細かく読むと、家族から懇願に懇願を重ねられ、次第に拒み切れなくなっていく様子が伝わります。

『文藝春秋』二〇一七年三月号で、諏訪中央病院名誉院長の鎌田実先生と「私の問題提起はおかしいですか」と題して対談をしました。その際に鎌田先生が、

「冷たいドクターは巻き込まれないんですが、患者思いの優しい先生は……」とおっしゃっていたのを思い出します。

認知症が原因で行方不明になった人が、二〇一六年の一年間に、全国で一万五千四百三十二人もいたそうです。

・・・

認知症の患者数は、現在でも五百万人くらいと言われています。六十五歳以上の高齢者の七人に一人だそうです。

